

◎夜空を見上げてみよう(冬編)

山に登って、テントサイドから、山小屋の窓から見上げる夜空は素晴らしい。都会で見られる星の数とは比べ物にならない。古代ギリシャ時代、この夜空を眺め、いろんな空想をめぐらし、星座を完成させた人々の思いの一端に触れたような気持ちになる。星座や簡単な有名星について、今回は特に星が美しい冬編について。

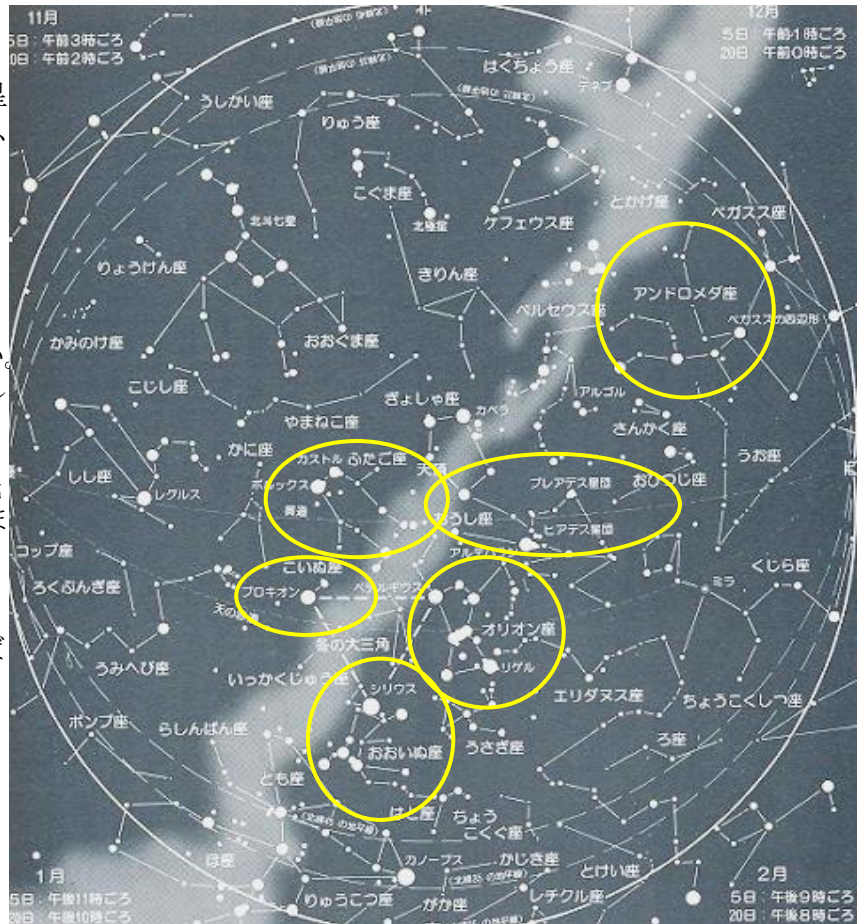
①宇宙は何でできているか

この地球に暮らし、夜空を眺めていると何となく宇宙を解ったような気がするが大きな間違い。我々は宇宙を構成する物質(質量)の4%程しか解明できていない(素粒子や原子すべて含めても)残り96%は未だ不明なままだ。そして宇宙誕生から138億年、遠くの星ほど光速に近い速さで地球から遠ざかっており、いまの変化はほぼ永遠に知る事は出来なくなる。

②宇宙に知的生物はいるか

この解析のために、各国しのぎを削っている。宇宙にある何千億個の恒星、惑星からすれば知的生命の存在の可能性は高いと思う。しかし、1番の難題は時間軸である。地球が生まれて46億年、知的人類の出現は1年で例えると大晦日の24時近くと、ほんの瞬間。もう1つは距離軸である。現在、これを埋める通信手段はない。多分これらを満足して知的生命に逢える確率は極めて低いだろう。

○本題に戻って、冬の星座の話をしよう。



冬の星座表

A. オリオン座

何といっても冬の星座の代表格はオリオン座である。サソリ(夏のさそり座)に刺されて死に、天に上った。右図はその星座図である。三ツ星がベルトそれを対角で結ぶ4つの星がはっきりと確認できる。右肩の赤い星をベテルギウスと言い、星の末期の状態で大きさはなんと太陽系の木星の軌道位まで有らしい。昔の人は源平に例えて平家星と言った。その対角にある青白い星をリゲルと言い源氏星と呼んだ。有名なオリオン大星雲はベルトの下の刀の部分(下の図でやや赤い部分)である。この星座は見つけ易いので是非覚えて欲しい。



冬の冬の大三角形(星座図)

B. 冬の大三角形

夏にも大三角形があったが冬にもある。右図のオリオン座のベテルギウスとおおいぬ座のシリウス(地球から8.7光年と最も近い一等星(-1.5等星)全天で太陽を除き最も明るい星)、こいぬ座のプロキオン(地球から11.4光年でシリウスに次いで2番目に近い1等星)を結ぶ逆三角形を冬の大三角形と言い、他の星座を見つける場合の羅針盤となる。

C. おうし座プレアデス星団

オリオン座の右上におうし座がある。角をオリオンに向けているがそれよりもやや上に小さく、青い星が群がっているのが見える。これは万葉の昔より、注目されていた星達で、和名をスバルと言う。本当に星の玉手箱の様な青い星の集まりで素晴らしい。ここは若い星が次々と生まれているエリアなのである。

D. ふたご座

この星座も比較的見つけ易い。プロキオンの右上に星座線のように仲良く並んだ二人を見つける事が出来る。更に面白いのは右の頭の星をカストルといい、1つに見えるが良く観察すると六重連星であるらしい。若しこの近くに惑星があり、人間が住んだとすれば、毎日6個の太陽が出たり入ったり、せわしく感じるであろう。

E. アンドロメダ座

一番右上の丸がアンドロメダ座である。古代エチオピアの王女は母の虚栄心のために怪獣の生贄にされた悲しい神話がある。星座は足を上げ横たわっている。その足の膝の部分に有名なアンドロメダ星雲がある。肉眼でもぼんやり見え、天の川銀河と双壁をなす。



オリオン座と冬の大三角形(写真)